

偶然に発見されるがんも減少

がん社会 を診る

中川 恵一

とも手がける日本対がん協会によると、コロナで、昨年のがん検診の受診者は3割も減っています。今年の上半期はやや回復しましたが、コロナ以前より17%も減ったままです。

今、すべてのがん患者の情報は個人情報保護しながら、国が管理しています。この「全国がん登録」では、がんの発見経緯も届けることになっています。

2018年の全国がん登録によると、この年にがん（上皮内がんを除く）と診断された日本人は約98万人でした。がんが見つかった経緯については、15%が、がん検診・健康診断・人間ドックによるものでした。

しかし、住民がん検診をも



イラスト・中村 久美

って発見されています。

たとえば、かぜをひいてせきが出るために撮ったレントゲンでたまたま早期の肺がんが見つかるパターンです。

早期がんで症状が出ることはまずありませんから、検査をしなければ発見できません。しかし、コロナによって、かかりつけ医への受診も減っています。20年度に病院や診療所に支払われた医療費はおよそ42兆2000億円で、前年度から1兆4000億円（3・2%）も減りました。

この減少幅は過去最大です。さらに、休日の数を補正すると、3・9%もの大きな減少です。

がん検診も病院での偶然の発見も減っている結果、今、がん患者が見かけ上、減っています。

大学病院などのがんの診断数が昨年は19年に比べて1

割近く減少したとの調査結果が日本対がん協会から今月下旬に発表されました。

検査を受けることでがん死亡を予防できる科学的エビデンスがあり、住民がん検診を実施している胃がん、大腸がん、肺がん、乳がん、子宮頸（けい）がんが対象です。

胃がんは19年比13・4%減と減少幅が最も大きく、大腸がん10・2%減、乳がん8・2%減、肺がん6・4%減、子宮頸がん4・8%減と続きました。

胃がんの減少が最大だったのは、口や鼻から内視鏡を入れることに不安を感じる人が多かったせいかと思えます。

その胃がんのステージ別では、ステージ1が17・4%と大きく減少していますが、ステージ2〜4では4〜9%と減少幅が少なくなっています。大腸がんでも同様の傾向で、がんの早期発見が遅れる結果となっており、今後、がん死亡が増えることになりま

す。（東京大学特任教授）